

【質疑応答】

○伊藤 それでは、ここでいま5人の先生方に研究報告をしていただきましたが、客席の皆さんからの質問を受けたいと思います。質問がございます方は、挙手をしていただければそこにスタッフがマイクを持ってまいりますので、お名前ともしよろしければ、どちらからの方かっていうことを言っていただいたうえで、質問をお願いいたします。

どなたかご質問、ご意見、コメント等、感想でも構いませんのでお願いいたします。じゃあ、お願いします。

○会場1 下の岩手県立図書館のほうで働いておりますアンポと申します。

今日は、大変どなたの発表も非常に興味深くて、図書館のほうで勤めているわけで、いろんな震災関係の資料っていうのが集まってくるんですけども、やはり自分の特に気にしている分野ですとか、ある程度得意な分野というところの情報にだけ目がいって、例えば一番最初の「ガソリンのパニック買いはあったのか」。あのあたり、あまり自分としては考えていなかった部分なんです。

振り返ってみると、私は、3月11日当時は東京都内のほうにいたんですけども、12日あたりに、そういえば向こうへ戻ると電気が来てないから、ちょっと携帯の充電器でも買いにいこうかって思って、東京で行ったんです。そうしたら、もうすでに売り切れているっていう状態がありまして。あとは、ガソリンのほうもやはり結構都内のほうでも早い段階から結構並んで、ばたばたしているなっていう印象があります、いま思い返してみると。

それはそれとしまして、図書館っていうところで働いている立場として、実際に今回の震災関係の資料っていうのを集めていて非常に思うのは、結果だけが出てくるんです。どうしてその結果に至ったかって過程っていうのが、あんまり実は記録として残されていないっていう部分があると思うんです。

皆さんそれぞれ専門分野のなかで、いろいろな調査ですとか、あるいは検討とか、考察とかされていて、そういった部分っていうのが、今後いろんな検証ですとか、いま現在どういう問題が起こっているのかっていうのを把握して残していくってことが必要だと思っていて、そのあたり、ぜひ図書館として一番やらなきゃいけないことが記録を残していくってことですので、ぜひご協力をいただければということで、よろしく願いしたいと思います。あまりまとまりのない話になってしまいましたけど、どうぞよろしく願いいたします。

○伊藤 貴重なコメントありがとうございます。そのほか、この先生にこういうことを聞いてみたいっていうことがございましたら。

じゃあ、お願いいたします。

○会場2 一関からまいりましたカンノと申します。税理士へのアンケートを発表された金子先生に。先生は、どう思われるかということでお尋ねしたいと思います。

ページ数は、13ページ、14ページあたりです。岩手県税理士の県などへのコメント

というところで、この辺では国も県もこの復興についてのスピードが遅いとか、動きが鈍いってことをこちらでは指摘をされている税理士さんのコメントがある反面、14ページのほうにいきますと、4のところですが、あまり過度な要望、要求を国や市町村にしてはよくないのではないかということをおっしゃられている。ちょっとこの辺の矛盾があるような気がするんで。一方ではもっと早くやるべきだ。いろんなことがあるんではないかっていうことを指摘しながら、一方では過度な要求をしていけないということがあるんです。

その際に、未曾有の影響といいますか、難を直面した方々が、このように専門の方々からあまり過度な要求なんかしてはいけませんよっていうふうにすると、例えば先立つものがお金であったり、あるいは法律に基づくいろいろな問題であったり、被災地なんかでの高台への移転っていうふうなことになるときに、これはどこにも相談できないというような、やっぱり行政に頼らざるを得ない。そして一方で市町村なんかの場合は、もともと誰かのお話にもありましたけれども、3.11 前にもう市町村の特に産業基盤が弱かったり、人口の流出が続いている被災地、沿岸地域の。こういうところは、自治体の財政、かなり弱っているところに、そこに要求はなかなかできないとなると、やっぱり国に対して法律の面から、予算の面からお願いしなきゃいけないんじゃないかというようなことも出てくるのはいた仕方がないことだと思うんです。

この辺の専門の税理士さんの方々のこの辺のコメントについて、どのようにわれわれ考えたらいいかというふうに思いますので、ご助言いただければと思います。

○金子 質問どうもありがとうございます。まず、いまご質問された、あるいはご意見いただいたことっていうのは、一つある種の矛盾があろうかということかと思えます。あともう一つは、行政に対する距離感ですか。頼らざるを得ないということだと。

前者に関して、まず矛盾ということに関しては、今回はアンケートに対するコメントですので、岩手県の方だけでも200ぐらいでしたか。コメントをいただいています。もちろんそれぞれの人の立場、あるいは考え方がありますので、ある人は頼ってはいけません。自分たちでしっかりやらなければ。特に税理士の方ですから、相手にしているのが中小企業の社長さんなので、社長さんたちに国とか、県がやってくれるからっていうんじゃなくて、「社長さん、あなたがしっかりして、中小企業を支えて、銀行とかからの融資を受けて、何とかいま乗り越えよう。もっと会社を大きくしてこう」というような励ましの気持ちとかを持つ方もいらっしゃる。逆に、もう、実際事務所そのもの、会社とか、工場自体が流されてしまった人に頑張ろうと言っても、もうどうしようもないようなことを思っている税理士の方は、おそらく何とか県とか、国とか、市でもいいから誰か助けてくれないかとか、あの工場をもう一回建ててくれれば、この社長さんならうまくできるのにという場合に、社長さんに頑張ろうと言っても、もうしょうがないっていうような感覚があるんじゃないかと思えます。

その意味で、矛盾といえば矛盾なんですけど、人によって立場、あるいは被害の状況が

違うということが、このコメントには表れているのかというふうに私は理解しております。

もう1点。行政、それを県ととるか、国ととるかとか、いろいろあろうかと思うんですが、頼らざるを得ないというのは、私も実はそのように考えております。

ただ税理士の方の一部がおっしゃるように、個人でできるもの、あるいはここでいうと中小企業の社長さんたちが、自助的に何か復興に対してできるもの。あるいはやる気持ちがある方に関して、しっかりやっていただくというのが大事なんだろうという気持ちも持っております。

ただ、こちらでも紹介させていただきましたが、税理士さん自身をして、私も一生懸命やっているだけというようなことが出てくるんです。ご指摘もたぶんそういうことだったんだと思います。これに関しては、もう個人のレベル、あるいはちょっとした企業というレベルの組織のレベルで対応できないものは、もっと大きなところでやはり市、県、国というところから必要な助成。特にものが流れてしまった沿岸部という、今回、報告のなかで中心に取り扱っておりませんが、そこはもう正直言って、一人一人がっていうレベルではないものが多いと思うので、そういったものは、確実に行政のほうでしっかり対応していただくという。

ただ、例えば盛岡なんかものが流れていませんけど、今後どうにかしなきゃいけないことに対して、個人もしっかりする。ただ行政じゃなきゃできない対策は、行政のほうでスピーディーにしっかりやってもらいたい。その線引きを少しでも明らかにできるようにいろんな提言をここは書かせていただいた。そういうスタンスでやっています。よろしいでしょうか。ありがとうございました。

○伊藤 じゃあ、いま、手挙がっていますので、もう1問受けたいと思います。

○会場3 すみません。座ったままで失礼します。私は、盛岡に住んでいるクマガイと言います。家は、陸前高田で高校も流されましたし、その前のあたりにある実家が流れてしまいましたけども。

それとはあまり関係ないんですけども、今日いろいろご報告を聞いて、なるほどこういう、簡単に言えば数量的なこと非常に大事なんだなと思いつつ、私は、盛岡文学、民主盛岡文学の事務局をやって、文章として残すっていうことが必要じゃないかなということで、3.11 以来も私たちのサークルでいろんなドキュメントや小説のかたち、あるいはエッセー、短詩系、いろんなので残しておりますけども、県立図書館にも2回ほど出した冊子を寄贈しておりますけれども、そういうちょっと的外れかもしれませんが、文章としてそのとき何が起きて、どう自分は感じたのかとか、そういうふうなことをある面で残すことが、どこかであっていいんじゃないかなあというふうに思うんですけど。

今日のご発表のなかでも文学部関係の方も数量的なのが多かったんですけども、そういう文学的なものっていうか、文章としていろんな体験とか、そういう津波のところ

を残す。私は、高田なんかのことをちょっと何回も行ったり、家が流れたりした様子なんかを文章として残しておいたんですけど、そういう点についてはどのようにお考えなのかなあというふうなこと。ちょっと無いものねだりみたいで申し訳ないんですけど。

○伊藤 震災の記録をドキュメントとして残すっていうご意見だと思いますが、どなたに。阿部先生。

○阿部 私、文学部出身なんですけど、数量的な研究をやっておりますけれども。確かにおっしゃるとおりで、私が、いま研究のスタイルとしては数量的なもので、今回もできるだけわかりやすく数字で説明するというをやっております、そういうかたちで分析しますと、全体像がどうなっているのかということとか、ある人のおかれた立場と意識の関係がどうなっているかってことが、数字になってわかりやすく表れるということで、私自身はそういう研究をやっているんですけども。

私と同じ社会学の分野でも、質的な研究をされている方もたくさんおりますし、実際に今回の震災ののちにも、ちょっと本の宣伝になるとあれなんですけども、私の知り合いの社会学者が編集して、3.11 のときに各地でどんな体験をした人がいて、そのことをどう書き残すかといったことを企画して、そういった本を出版するというようなことをやっている方もおられますし。

ですので、そういった記録は、さまざまな立場の方がこれから出していかれるのかなというふうに思っております。またわれわれの研究としても、いま、今日ご紹介した統計的、数量的な研究のほかに質的な調査というものこれからやっていきますので、その何パーセントっていう数字にはなかなか還元できないような、お一人お一人の方のおかれた状況ですとか、お気持ちというのをすくい上げながら、復興というのを考えていく。そういう調査をしていきたいというふうに思っております。ありがとうございました。